2024年度学校評価（慶應義塾高等学校）

本校の教育理念	学問の修得に基づいた「独立自尊」の精神を育て、気品と智徳を備えた生徒を育成することを目標とする。

本校の特色	本校は、創立者福澤諭吉の精神に基づき、小学校から大学に至る一貫教育において、中等教育の一画を担うものである。従って、在校生が慶應義塾大学へ進学することを前提として教育方針は定められる。また、本校は、大学と隣接しており、カリキュラムあるいはクラブ活動などにおいて、大学との密接な連携がなされる。一貫教育校として、大学そして小・中学校との連携は学校教育の全ての面に関わるもので、今回の学校評価においては、特別の項目として取り上げてはいないが、個々の項目にその要素が含まれる。

学校評価の経緯と今年度の評価対象	本校では、平成２０年９月に初めて学校評価委員会を設置した。今年度は教育活動（必修科目・卒業研究）、特別教育活動（クラブ活動・生徒会）、安全管理、運営（図書）、学校いじめ防止方針に基づく取組の実施状況について点検・評価を行う。達成度については担当者判断、または生徒によるアンケートを実施し、Ａ～Ｄ段階で表示する。

評価項目	取組目標	具体的な方策	達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
教育活動					
必修科目	国語 読解や表現活動を中心に授業を行い、論理的思考力、表現力、語彙力の向上を図る。古典では、伝統文化の本質や古典を学ぶ現代的意義の体得を試みる。	幅広い時代の多様な文章に触れる。読解に加え、考えを持ち、自らのことばで表現する機会を設け、理解が深まるよう導く。	各担当が特長を生かした。様々な作品から知識・教養を得、自分の考えを適切なことば・表現で伝える活動を充実させた。	A	一定量の文章を書き論理的思考力を養う等、言語活動の一層の充実とその前提となる語彙力、文法事項等の理解力をより高める。
	地理歴史 地理的および歴史的な見方・考え方を養うために、多面的・多角的に地理的事象および歴史的事象を理解し思考する力を身につけさせる。	資料や映像などを用いて、生徒の興味関心を高めるとともに、生徒が主体的に取り組み理解を深めることを促す。	実習作業や記録・映像等を活用して、当該分野の理解にリアリティを与えるとともに、生徒の思考表現にも力をかけた。	A	現代社会では、個人の高い情報リテラシーが欠かせない。社会状況を適切に理解しつつ、個人や社会が進むべき方向を模索するような契機を増やしたい。
	公民 政治・経済・法律・倫理・哲学といった幅広い分野を扱い、深い知識と教養を身につけることを目的とする。	知識の習得に特化することなく、生徒との双方向のコミュニケーションをとりながら授業を展開する。	ディベート等の諸活動と講義を組み合わせることで、各分野の見方・考え方を主体的に学習することができた。	B	学習した内容を自らの考えにまで発展させ、異なる意見をもつ人との討論を通じて新たな気付きを得られるような授業を目指したい。
	数学 基礎から高度な内容まで、幅広く取り扱い、定着させるとともに、大学で学ぶ数学へ円滑に接続する思考力を身につける。	考え方を理解させ、演習によって確認する。理解の足りない生徒へは補習や課題によって補う。	おおむね達成できた。	A	理解の足りない生徒への授業外のフォローについては、極力授業内で完結できるように努める。
	理科 幅広い科学の知識を身につけ、身近な現象が科学と密接に関係していることを理解し、科学的な思考法を習得する。	授業を通して基礎知識の定着を図り、体験的な実験、観察等を行うことにより思考や理解を深める。	講義・実験・観察のバランスを取りながら、知識や体験を通して自然現象の仕組みを理解させることができた。	A	講義は種々のコンテンツ、デバイスの活用でよりわかりやすく、実験・観察はより効率よく進められるよう工夫を重ねたい。

評価項目	取組目標	具体的な方策	達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
必修科目	保健体育 身体活動を通じ、技能を高め、将来の健康的な生活習慣の礎を築く。健康について正しい知識を学習する。	個人・集団スポーツを偏りなく授業に配分する。BLS教育を通じ、「命」の尊さを学習する。	個人・集団スポーツを偏りなく配分し実施できた。BLS教育を通じ、「命」の尊さを学習することができた。	A	安全・危機管理への配慮を行う必要がある。体力・技能に差があり、個々に対応した指導が必要である。
	芸術 豊かな表現力と幅広い知識、加えて鑑賞する能力を伸ばす。	基礎的な表現方法を講義、実習において会得する。さらに芸術作品を鑑賞することにより感性を高める。	生徒それぞれの個性に配慮しながら表現領域での授業が実施でき、鑑賞においてもバランスの良い授業展開が行えた。	A	より幅広い興味に対応した授業展開を目指すとともに新しいメディアの利用等も模索したい。
	外国語 英語 4技能（聞く・話す・読む・書く）をバランスよく引き伸ばしながら、多言語・多文化への理解を深める。	語彙・文法事項の習得をしながら、様々な言語活動の機会を多く提供する。	LMSやTAの活用により、授業内で生徒に言語運用を促すことができた。	A	新カリキュラムの導入に伴う新しい英語活動等の検討を継続したい。
	第二外国語 「読む・書く・聞く・話す」の4技能を伸ばし、総合力を高め、異文化理解も深める。大学の学習にも繋げる。	２年次に続き、3年次での継続学習を狙う。継続する中でより実践的な活動も行い、向上心と意欲を高める。	生徒のレベル差が見られる部分もあったが、４技能を意識したバランスの良い授業を展開することができた。	A	①定期的に発音チェックを行い修得を促す。 ②リスニング練習の回数を増やす。 ③実践の機会をさらに増やす。
	家庭 家庭生活と環境問題を結び付け、持続可能な生活を営むために必要な知識と技能を身につける。	講義により基本的な知識を学び、調べ学習により理解を深め、実習・体験により実践的な技能を身につけさせる。	概ね達成できたが、実習や体験の場面が少なく、実践的な技能の習得の面で課題が残る。	B	実習、体験の授業時間の確保のために、学習内容を改めて検討する。
	情報 生徒間の既習内容の差が大きいことが予想されるプログラミングに関して、どの生徒にもフィットした学習となるようにする。	自学自習型の教材を工夫するとともに、チーム・ティーチングによるきめ細かなサポートを行う。	前年度よりは改善したが、まだ十分とは言えない。	B	初心者には副教材「Python入門」にわかりにくいところがある。引き続き、さらなる教材の工夫ときめ細かなサポートを試みる。
卒業研究	・多様な講座を設定し、生徒の希望に応じて選択ができるようにしている。研究活動を通して生徒各人が論理的思考を養い、表現力を身につけ、大学へ進学するための準備をさせる。 ・最終的に４８講座を設置した。その内訳は、言語分野４講座、文学分野２講座、地理・歴史・公民分野１１講座、数学分野１０講座、理科分野３講座、保健・体育分野７講座、芸術・芸能分野６講座、家庭・生活分野３講座、情報・コンピュータ分野２講座である。 ・優秀な卒業研究として７論文を選出した。				
	言語 言語に関する問題について理解を深め、取り組む課題を発見できるよう指導する。 論文執筆に必要な知識や表現の方法を習得させる。	文献や言語資料を提示したり中間発表の場を設けたりする等の指導により、言語事象について考察し学問的に表現する力を育み、論文執筆の意欲が高まるよう導く。	情報や媒体を適切に使用し、互いに比較検討しての論文執筆を支えられた。 進捗や理解度に差があるときの対応に苦慮した。	A	より多くの論文を参照するよう支援すること。また、技術的な支援については、教員間で手引きを作成できるとよい。

評価項目	取組目標	具体的な方策	達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
卒業研究	文学 生徒が自身のテーマを発見し深められるよう、適切な指導、助言を行う。加えて、論文の執筆に必要な知識や表現力を身につけさせる。	学術文献の紹介や講読、映像等の紹介、必要に応じた発表、実地研修、講師の招聘などを行い、生徒の意欲が高まるよう導く。	生徒が主体的に行動できた。先行研究に目を通しつつ調査し、グループ討論等を通して自らの結論を導き出した。	A	個々の生徒の興味関心に応じた指導や論文の丁寧な添削を引き続き行うために、できれば15名以下の開講が望ましい。
	地理歴史公民 自らの興味関心に基づいて研究テーマを定め、先行研究や史資料を積極的に収集し、最終的に12,000字程度の論文として研究成果をまとめる力を育む。	各担当教員の指導のもとで、各分野の基礎基本を学びながら、発表や議論を通して研究を進める。	生徒が自ら設定した問いに対して、先行研究などを踏まえて多角的・多面的に考察することができた。	B	研究計画の段階でつまずく生徒等には個別により沿いながら、よりきめ細やかな指導が必要だと考えられる。
	数学 枚数・字数制限は設けないが、論文を提出させる。基礎的・応用的な知識を身につけ、論文を作成する力を育む。	テーマにそって自ら課題を見つけ出し、指導教諭の指導の下、深く探究する。	生徒各自が専門書や先行研究を読み込み、他の生徒や教員と議論を重ねることで論文を完成させることができた。	A	すべての生徒に対して、研究の進捗度合いを確認する機会を頻繁に設け、より専門的できめ細やかな指導を心がけたい。
	理科 理科の各分野からテーマを設定して探究する。学習、実験、調査を通じて研究方法や科学的思考を学び、体験的に科学を理解する。	実験観察・観測・文献調査・発表などを通して、科学的探究の方法を経験させ探究活動を行わせる。	科学的な研究、考察方法を学習した上で、各自が設定したテーマに基づき、実験・観察を行い、考察を行うことができた。	A	研究で扱う実験機材や材料は研究内容が固まってから準備するので、研究テーマをなるべく早く決められるようサポートしていきたい。
	保健体育 体育・スポーツや健康に関する事をテーマとし、調査・実験によりデータを収集し、分析を行う。	各個人の研究テーマを確認して、個別に指導する。	競技性のみならず、マネージメント等の仕事にまで興味を持つ者がいて、良く調べていた。	A	参考文献を多用する者が多かったので、必要最小限にとどめ、自ら調査することを勧めたい。
	芸術・芸能 様々な体験をすることで芸術的感性を磨き、最終的に生徒自らが選んだテーマに沿って研究発表に繋げる。	優れた芸術家の作品分析、研究を通じて各々の芸術における感性を高め、その成果を作品制作、論文に反映させていく。	生徒自らが選んだテーマを時間をかけて取り組んだ結果、概ね納得のいく結果が得られた。	A	芸術に対する探究心、見識を深めながら高度な作品、論文の発表に繋げさせたい。
	家庭・生活 生活の中から興味関心のあるテーマを設定させ、調査、体験等を通して研究を行う。研究成果を12,000字程度の論文にまとめる。	適宜、面談や発表の場を設けながら研究を進める。先行研究に触れることにより論文の書き方を理解させる。	計画的に調査を行うことができたが、データの分析方法や文章の書き方に課題が残る。	B	多数の先行研究に触れさせる。視野を広げるためにグループワークを取り入れ、データ分析や執筆に生かす。
	情報コンピュータ 年間の活動の中でも最も重要な「研究テーマ設定」を行う最初の1-2か月を緊張感をもって取り組めるようにする。	研究テーマ設定の重要性をわかりやすく伝えるとともに、「研究計画発表会」を外部の方を招いて行う。	「研究計画発表会」を外部の方を招いて行うことができた。効果はあったと思うが、テーマ設定が遅れる者もいた。	B	研究テーマの設定にいたる過程で様々な体験・刺激を与えるため、早い時期に外部の方や卒業生などと話ができる機会を作りたい。

評価項目	取組目標	具体的な方策	達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
	・受講した生徒にアンケートを実施した結果、取り組みに対する満足度（数字が大きい方が満足度が高い）は５…47.3%、４…37.8%、３…13.4%、２…1.5%、１…0%であった。 ・生徒が卒業研究に取り組んでよかったと感じた点（複数回答可）は、「論文の書き方を学ぶことができた」が最も多く63%、次に「今まで知らなかったことを知ることができた」59%、「達成感が得られた」56%、「担当教員の指導が行き届いていた」50%、となっていた。 ・生徒が卒業研究に取り組んで、こうすればよかったと思うこと（複数回答可）は、「もっと内容を掘り下げればよかった」が最も多く50%、次に「計画的に研究を進めればよかった」48%、「参考文献・データを増やせばよかった」35%となっていた。				

評価項目	取組目標	具体的な方策	達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
特別教育活動					
クラブ活動・生徒会	クラブ活動 クラブ活動における安全性を高めるために、施設面だけでなく、体調面にも配慮しながら生徒の健全な心身の育成をめざす。	熱中症予防の対策として、大型WBGT計を4台設置し、日吉地区以外で活動するクラブには、携帯型WBGT計の貸与を行う。	21のクラブが51名のクラブ活動指導員と契約を結び、教員と協力し、安全面に配慮しながら活動ができた。	A	生徒が安全に活動するため、施設管理の徹底と熱中症予防対策に万全を期したい。ハード面に加え、講習会の実施や多様なコミュニケーションツールを活用した情報共有を行い、予防意識の向上を図りたい。
	生徒会活動 「独立自尊」「気品の泉源」「智徳の模範」という慶應義塾の理念を大切にしながら、生徒が互いに尊重し合い、主体的に活動することを目標とする。	塾高の森保全活動を実施するにあたり、専門家を招聘し、安全に活動するための講習会を開催する。また、招待会議や日吉祭では、生徒間、生徒教員間の協議を重ねていく。	多岐にわたる活動を、生徒会が主体的に企画・運営した。これらの経験を通じて、生徒会の組織力や実行力の向上にもつなげることができた。		継続性が重要であるため、今年度の達成状況を検証し、より良い形で発展していくことが重要である。また、外部環境の変化にも柔軟に対応できる体制を整え、来年以降も円滑に活動できるよう準備していきたい。
安全管理					
設備	・教職員の協力を得て、定期的に教育施設・設備の保守・点検を行い、事故防止や安全対策を図る。 ・生徒の動線に目を配りながら、安全面に配慮する。 ・校内の老朽化した部分の改修やバリアフリー化を行う。 ・必要な設備の新設を行う。	・定期的に各教育施設の安全点検を行う。必要に応じて設備の修繕・改善を行う。 ・第一校舎の外壁の修繕を行う。教室内の修繕およびシューズボックスの設置を行う。 ・杖・車いすなどでの移動が可能になるようバリアフリー化を進める。	・部室棟を中心に大掃除、廃棄物処理、点検を実施し、危険個所の発見に努めた。 ・第一校舎の外壁の修繕（４年目）、一般教室の修繕（３年目）、シューズボックスの設置（２年目）を行った。 ・A棟1階から4階まで手すりを設置した。	A	・教育施設・設備の保守・点検を定期的に行う。 ・校内の老朽化した部分の改修と新規設備の設置を引き続き行う。 ・バリアフリー化をさらに進める。
保健衛生	・環境衛生調査を継続して行い、生徒の快適な学校生活のための環境を整備する。 ・保健衛生に関する情報を教員や生徒に適宜提供する。 ・各種感染症への対応を適切に行う。	・年2回、環境衛生調査を継続して実施する。 ・関係スタッフと相互に協力し、迅速に教室環境の充実を図る。 ・食物アレルギー情報を担任と共有し、緊急時対応を準備する。 ・校医・看護師と連携し、有効な感染症対策を実施する。 ・感染者への迅速な対応とケアに留意する。	・環境衛生調査を２回実施した。 ・食物アレルギー情報を担任と共有した。 ・感染症対策として、マスク着用、黙食、教室の換気対策を呼び掛け、発生した感染について迅速に対応した。	B	・環境調査を引き続き実施していく。 ・各種感染症への対策を引き続き実施する。
危機管理	・生徒・教職員が安全で安心して学校生活を送ることができるよう、安全教育を推進し、安全管理を徹底する。 ・非常時の意思決定の方法について検討する。 ・非常事態が起こる前に、想定される対応策を準備する。	・避難訓練の実施。 ・生徒・教職員対象のBLS講習の実施。 ・一斉連絡システムの活用および改善。 ・９月に備品の補充点検の実施。 ・南海地震クラスの大災害が発生したときにどのように対応すべきか、校内で議論する。 ・アレルギー対応の非常食を準備し、備蓄場所を確保する。 ・不審者対応について周知する。	・避難訓練を実施した。 ・一斉連絡システムを活用し、運用の改善を図った。 ・アレルギー対応の非常食を備蓄する設備のための検討を行った。	B	・一斉連絡システムで保護者向けの情報発信を強化する。 ・アレルギー対応の非常食を備蓄する設備を引き続き検討する。 ・災害への対応について必要に応じて周知する。
運営					

評価項目	取組目標	具体的な方策	達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
図書	・読書推進だけでなく、知的好奇心を掻き立てることができる、様々な知に出会える場所を目指す。 ・より多くの生徒に図書室の魅力を伝える。 ・資料へのアクセスをよりわかりやすく、利用しやすい図書室を目指す。	・生徒・教員など、利用者の協力を得ながら、知の交流の場として図書室が活用されるよう、展示やイベントなどを企画する。 ・学校図書館として学習・研究に威力を発揮でき、また新たな知との出会いの場所となるような選書・蔵書構築をする。 ・学術的価値の高くない、古くなって利用されていない資料を除籍し、有用な資料によりアクセスしやすくする。 ・広報にポータルサイトやTeamsを活用し、図書室からの情報発信を心がける。	・生徒が直接書店で図書を選定する「選書ツアー」を実施した。選定した図書を参加生徒に展示してもらい、図書室の存在をより身近に感じてもらうことができた。 ・学術的価値の高くない、古く利用されなくなった資料を除籍し、あわせて利用の少ない資料を集密書架へ移動した。 ・『塾高図書室だより』の発行を開始した。 ・卒業研究のための資料の調べ方の資料を改訂した。 ・バリエーション豊かな蔵書構成を心がけた。一方で、購入希望にはできる限り応えた。	A	・知の交流の場として図書室が活用されるよう、持続可能な展示やイベントなどを企画する。「選書ツアー」を継続して実施する。 ・授業利用、授業支援の推進 ・卒業研究のセミナーを図書室で行うなどして、図書室に入る機会を増やす。 ・新しい資料を増やすだけでなく引き続き学術的価値の高くない、古くなって利用されていない資料を除籍し、有用な資料にアクセスしやすくする。
学校いじめ防止基本方針に基づく取組 の実施状況					
いじめ防止対策	・生徒の声を受け止め、しっかり向き合う。 ・迅速に、組織的に対応する。 ・保護者、関係機関との連携を図る。 ・教員向け講座を実施し、教員のスキルアップを図る。 ・SNS上のいじめ、中傷への対応を検討する。	・担任による生徒・保護者との面談を実施する。 ・クラス、クラブを通して望ましい人間関係の構築を進める。 ・いじめ事案に対し、いじめ防止対策委員会を中心とした対応を行う。 ・あらゆる情報に迅速に対応する。 ・相談室の利用を促進するためのイベントを実施する。 ・一貫校いじめ問題連絡会で情報を共有する。 ・教員向け講座を実施する。 ・SNSについて生徒に注意喚起を行う。	・生徒・保護者との面談を必要に応じて実施した。 ・イベントや講演会を通じて生徒・保護者に相談室の積極的な利用を促し、相談室と連携した。 ・保護者向け講座を１回、教員向け講座を３回、生徒向け講座を３回実施した。 ・一貫校いじめ問題連絡会で情報を共有した。 ・SNS利用に関する注意事項を4月に配付し注意を喚起した。	B	・生徒、保護者との面談を積極的に実施するように機会を捉えて促す。 ・保護者・教員・生徒向け講座を開催し、幅広い参加を募る。 ・発生した事案に迅速に対応する。